

建学の精神とキリスト教 - 501 【第11回】

米国におけるキリスト教



同志社大学 神学部教授
良心学研究センター長
小原 克博

1

Overview

1. 大統領選挙から見る宗教事情
2. 歴史から見るアメリカの精神と宗教
3. 価値観の違いによる分断
—— 続く文化戦争
4. 今回の課題

2

1

大統領選挙から見る 宗教事情

3

新島襄と大統領選挙

ある日、友人がアメリカ合衆国の地図書（『聯邦志略』）を貸してくれた。それはあるアメリカの宣教師（E・C・ブリッジマン）が漢文で書いたもので、私はそれを何度も読んだ。その本で**大統領の選出**、授業料無料の公立学校や救貧院、少年更生施設、工場などを建てることを知って、脳みそが頭からとろけ出そうになるほど驚嘆した。（「日本脱出の理由」1865年、『新島襄自伝』17頁）☞『新島襄365』【4月18日】

4

2020年大統領選挙を振り返って

- ・バイデンは、1960年に当選したケネディ以来、米国史上二人目のカトリックの大統領となった。
- ・カトリックは浮動票が多い。カトリック票を多く獲得した候補者が勝つ傾向が強い。
- ・保守派 vs リベラル派の対立は教派の違いを横断している。保守派の大同団結（→ キリスト教保守派、**福音派**）。
- ・保守派 vs リベラル派の争点（→ **文化戦争**）：中絶、同性婚（→ **多様性**）、科学に対する評価（進化論・**地球温暖化**）

5

アメリカの政教分離

- ・ Separation of Church and State（教会と国家の分離）
 - ・ Separation of Religion and State（宗教と国家の分離）ではない。
- ・ 合衆国憲法修正第一条（The First Amendment, 1791）
 - ・ 「連邦議会は、国教の樹立（establishment of religion）を規定し、もしくは信教の自由な行為（free exercise thereof [=of religion]）を禁止する法律を……制定することはできない」。

7



<https://www.cnn.co.jp/photo/35165409.html>

6

大統領の信仰

- ・ 大統領のほぼ全員がクリスチャン
- ・ 聖公会（11名）、長老派（8名）、バプテスト（4名）、ユニテリアン（4名）、メソジスト（3名）、オランダ改革派、クエーカー（2名）、会衆派（1名）、カトリック（2名）

Pew Research Center “Biden is only the second Catholic president, but nearly all have been Christians” (2021) より

8

アメリカの宗教

- ・プロテスタント 43% (減少傾向)
- ・カトリック 20% (減少傾向)
- ・無宗教 26% (増加傾向)
- ・モルモン教 2%、ユダヤ教 2%、イスラーム 1%、ヒンドゥー 1%、仏教 1%、他の宗教 3%、無回答 2%

Pew Research Center “In U.S., Decline of Christianity Continues at Rapid Pace” (2019)より

9

2

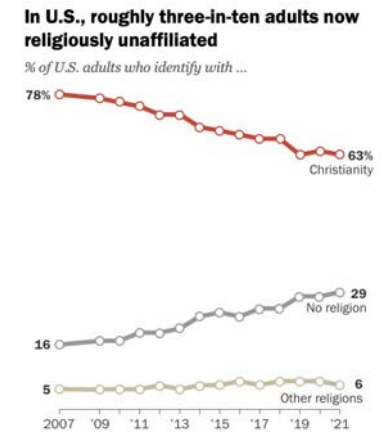
歴史から見る アメリカの精神と宗教

11

アメリカ成人の3割が無宗教

10年前と比較し、クリスチアンの割合は12%減少し、無宗教の割合は10%増加している。

Pew Research Center, “About Three-in-Ten U.S. Adults Are Now Religiously Unaffiliated” (Dec 14, 2021)



10

起源としてのピューリタン

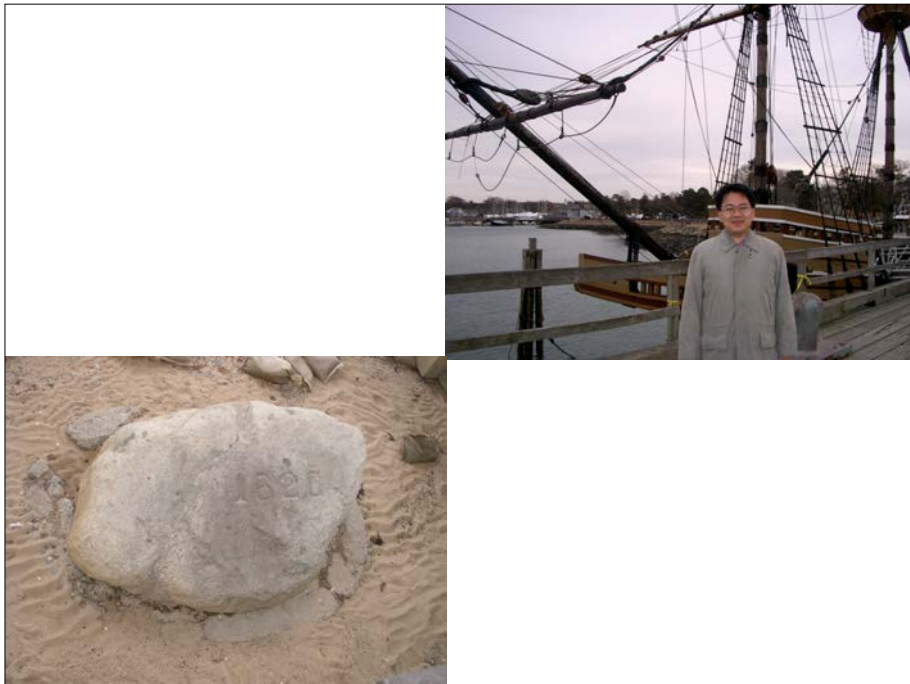
- ・1534年、ヘンリー8世が離婚問題をめぐって対立したカトリック教会から、英国国教会を独立させる。
- ・宗教改革の精神の徹底を求めた**ピューリタン**（清教徒）の群れの中から、会衆派、長老派、バプテストが生まれる。
- ・国教会との衝突後、オランダへ逃亡。

12

新天地を求めて

- 1620年、ピルグリム・ファーザーズたちがメイフラワー号で新大陸を目指す。プリマスに到着。ボストンを中心に植民地を形成。後に、アメリカ・オランダ改革派教会、アメリカ・ドイツ改革派教会、クエーカーが入植。
- ニューイングランド、とりわけ、マサチューセッツ州では**会衆派**の影響が大きい。会衆派は後に同志社の信仰的起源となる。

13



15



14

信仰復興運動

- 初期入植者たちの精神を再確認しようとする機運が高まってきた18世紀前半に起こった**信仰復興運動（リバイバル・ムーブメント）**は、信仰の覚醒、感情的な高揚感、熱狂的な一体感を生み出す大衆伝道として展開され、社会に広く影響を及ぼすことになった。
- ニューイングランドでは、会衆派牧師ジョナサン・エドワーズ（1703-58）が活躍。
- ジョージ・ホイットフィールド（1714-70）はジョージアからニューイングランドまで植民地を幅広く巡回することにより、教派や地域を超えた信仰復興をもたらし、植民地の一体感を醸成し、それがアメリカ独立革命の成功の一因になったとも言われている。

16

原理主義者の登場

- 原理主義者 (fundamentalist) という言葉は、1920年代、米国において、キリスト教保守派が**進化論**や近代的な**文献批評学** (聖書を「神の言葉」としてではなく古典文献として分析する) と対決するために用いた「自称」であった。
- 1925年、テネシー州「スコープス裁判」。進化論を公教育で教えることの是非が争われ、全米の注目を集めた。進化論を教えて訴えられた生物学教師スコープスは敗訴したが、原理主義の考え方は、科学に反する前近代的思想として批判された。

17

20世紀初頭の原理主義者と 現在の福音派の違い

- 両者は中核的な信念を多く共有しているが、原理主義者が世俗社会からの分離を強調していたのに対し、福音派は社会的・政治的責任を意識している (→ **宗教右派**) 。
- 1960年代、時代背景としてのカウンターカルチャー。政教分離をめぐる訴訟 (公立学校における祈祷・礼拝の禁止)
- 1980年代以降、福音派の政治団体による共和党支持

19

福音派の誕生

- 1942年には穏健派を中心として全米福音派連盟 (National Association of Evangelicals) が結成され、New Evangelicals と名乗った。
- 長年にわたって英語の **evangelical** (福音派・福音主義) は、ドイツ語の evangelisch に対応するものとして単に「プロテスタント」という意味に過ぎなかったが、その用語法が1960～70年代以降、変化してきた。

18

3

価値観の違いによる分断 — 続く文化戦争 —

20

価値観の分断——文化戦争

- 福音派・宗教右派
 - 伝統的な価値の崩壊（中絶や同性婚等）に立ち向かうために、教派を超え大同団結し、政治的影響力を及ぼす。
- 文化戦争（Culture War）の争点
 - 中絶、同性婚、銃規制、地球温暖化、移民、政教分離など

21

分断の例外としての親イスラエル

- 共和党、民主党ともに、イスラエルとの関係を重視する（共和党の方が強く重視）。
- 2017年、トランプはエルサレムをイスラエルの首都として認定し、米国大使館をテルアビブからイスラエルに移すと表明し、翌年、それを実行した。
- 親イスラエルの中核の一つは、キリスト教シオニズム
 - イスラエル建国（1948年）を神の摂理と考えている。

23

トランプ運動と信仰復興

- ドナルド・トランプは、保守派クリスチャンが抱く危機意識を巧みに受けとめ、自らが伝統的なキリスト教の擁護者であると主張し、支持をとりつけた。
- トランプ現象は、トランプという特異な人格の持ち主によって引き起こされた一過性の現象ではなく、それ以前にすでに存在していた信仰復興運動と政治（ナショナリズム）との構造的な関係の上に生起したと言える。

22

4 今回の課題（600～800字）

- 今回の講義の中で、あなたの印象に残った（重要であると思った）点（複数可）を、その理由と共に述べてください。
- 『新島襄365』【12月1日】～【12月31日】を読み、もっとも関心をひかれた日付を《二つ》あげ、それぞれ、その理由を述べてください。

24